

「ドライブ・マイ・カー」鑑賞記

佐々木 真理

(Facebook, 2022.2.11 より)

今話題の濱口竜介監督・脚本による村上春樹原作の「ドライブ・マイ・カー」を観てきました。

ネット予約して空席を確認すると、ガッラガラの中席だらけでほぼプライベート空間のようだったので、映画館には申し訳ないけど内心ウキウキして出かけました。

しかし原作が村上春樹、179分の長編ということで、睡魔と首痛と足ムズムズに悩まされると思い、首の防御のために小さめのクッションとネックパッドを持っていくことにしました。でも眠気防止だけではどうにもならないから、面白い内容でありますようにと祈りつつ。

さて映画館に到着し席に着いて見回すと、ネットで確認した時とは大違いでほぼ満席に近い状態。両肘張ってのびのび座ろうと思っていた私の両隣に「お・じ・さ・ん」。しかも右隣のおじさんはビッグサイズのポップコーンにジュースのセット、左隣のおじさんはこれまたビッグサイズのナゲット（ソースを付けて食べるタイプ）とジュースのセットを抱えての登場。映画が始まるとともにもぐもぐ食べ始めました。いえ、良いんですけどね。私が映画鑑賞中は飲食しない人間なだけです。でも両脇からビッグサイズで攻めてほしくなかった。

3時間近く持つかないという心配は不要でした。あつという間の3時間で。一瞬たりとも眠いことはありませんでした。広島の見慣れた風景が満載なので、それを確認するのも楽しかったです。しかし私の右隣のビッグサイズポップコーンおじさんはお腹が満たされたからか居眠りを始めました。寝るのは構いませんよ。私自身も心配でしたから。でも大きな寝息言い換えれば小さいびきを立てておられるのには少々困り、肘でちょんちょんと突いてみるも収まらず、「気にするな！聞こえない！聞こえない！」と右耳に言い聞かせているうちに何とか映画に集中できました。やれやれ。

話は変わりますが、いびきって子供の頃や若い頃はかかないものですか？小中高大の長い学校生活の中で授業中に居眠りをする人は大勢見てきましたが（白状しますが私もです）、いびきをかきながら居眠りしている人を見たことがありません。机の上を涎の海にして寝ている男子はいました。先生がそのO君を起こしに席まで来られ彼の顔をグイッと手で上げられたのですが、先生の手には彼の涎が付いて、びっくりして即座に手を離れた先生は急いで水道に行かれ丁寧に手を洗われていたのを思い出します。居眠りといえば島から通っていたMさんを思い出します。私の隣の席だった彼女が「私がもし居眠りしたら起こしてね」とお願いしてきたので了解したところ、案の定彼女が居眠りを始めたので肩をトントンと叩いて起こしてあげたらものすごい勢いで叩き返されたのは、ほのぼのした良い思い出です。あ、いびきや居眠りについて書きたいのではありません。「ドライブ・マイ・カー」についてです。気を取り直して。

最初から映画は淡々とただひたすら淡々と進みます。これといった山も谷もなく、感情がひどく揺さぶられるということもなく進むので眠くなりそうなものですが、不思議とそんなことはありませんでした。何度か涙がぼろぼろこぼれて仕方ない場面があったのですが、どうして自分が泣いているのかその時はよく分か

らないといった具合です。覚えているところでは、北海道の雪の道を車で走る場面で急にしばらく無音になるところ。それとチャーホフの「ワーニャ伯父さん」の演技の練習をしているところ。雪の道の方は、今まで観てきた主人公と運転手の気持ち（過去）が分かってきたところに「無音の雪景色」という演出が効果的だったからか。「ワーニャ伯父さん」では、役者の演技が実際上手かったからかもしくは「ワーニャ伯父さん」のセリフが琴線に触れたか。決して登場人物の感情によって出た涙ではないようです。「ワーニャ伯父さん」の演技指導の中で「どんなことがあっても生きていかなければいけない。生きていける」みたいなセリフが何度も何度も出てきました。主人公の男性とその運転手の女の子の心に共鳴するものだろうし、この映画を観ている人たちの中にも共感する人がたくさんいたと思います。「ワーニャ伯父さん」を読んでからこの映画を観た方がより理解できたかもしれません。

詳細な具体的な感想を言うのが難しいのですが、観終わった今、観て良かったと思うし感動しているし反芻しています。自分が何に感動したのかいまひとつ分からないけど感動している事実。もしかしてこういうのを映像美っていうのでしょうか？人物が感情をむき出しにせず淡々とした小津安二郎さんの作品みたいな。小津さんの映画は言葉で多くを語らなくても各人物の気持ちがとてもよく分かります。でもそれは自分が日本人だからと今まで思っていて、海外の方にこの心の奥まで果たして理解できるのかなと感じていました。しかし小津さんの作品も村上さんの作品も海外で高評価で人気であるところを見ると、言葉に頼らず映像の力で心情を十分表現できていることに感じ入りました。説明がちになって情緒に欠ける翻訳本のようなのではなく、ストレートに心に届くのだと思いました。これには役者の力量も必要ですね。

村上春樹さんの作品は「ノルウエーの森」しか読んだことがありません。「羊をめぐる冒険」は途中まで読んだだけです。ほんのこれだけの読書量で言うのは憚れますが、村上春樹さんの作品を映画にするって難しいような気がします。退屈になっちゃうかも。それなのにこの「ドライブ・マイ・カー」は約3時間もの間私をのめりこませました。濱口竜介さんによる脚本・監督が凄いのかもしいと思います。それを確認するために、「ドライブ・マイ・カー」の原作を読むことと、濱口監督の他の作品を観てみたいと考えています。

まさかのあつという間の3時間でしたが、それは感覚だけで、実際3時間も座りっぱなしだったことを立ち上がった瞬間に痛感しました。ふくらはぎが痛い……。少し歩行困難です。これはエコノミー症候群に違いありません。国際線の飛行機や夜行バスに乗った時に私はこの症状に悩まされます。ベトナムで長距離バスに乗ったことがあるのですが、このバスはベッドが確か2段3列になっており、横になって寝た状態で乗れるのです。こんなバスが日本にもあったら良いのにと今でも思います。（当たり外れがあるようですが）

最後の最後まで横道にそれました。なぜベトナムの話で終わろうとするのか、私。

もう一回観たいとは思いませんが感動したことは確かです。こういう映画、好きだな。